

# 祭礼の「唐人」装束 再現の試み

—近世後期 名古屋東照宮祭礼・茶屋町を事例に—

沖本 清美\*・扇澤美千子\*\*

## 1. はじめに

### 1-1 再現を試みるに至った経緯

筆者は以前、名古屋東照宮祭礼に現れた「唐人」警固の推移とそれに伴う「唐人」装束の展開と系統について、茶屋町を中心に年代を追って整理し、「唐人」装束の分化を検討した。特に幕末期については、名古屋市博物館蔵伊藤次郎左衛門家資料および年代の近い絵画資料をもとに、茶屋町「唐人」装束の解釈を「小唐人」を例に行った<sup>1</sup>。その際、装束の細部を検討するにあたって、製作可能で着装に無理のない最も適当と思われる形態を捉えるため、実際に再現、試着を試みる必要性を感じた。

再現の対象は、名古屋東照宮祭礼に茶屋町が出した「唐人」警固の装束のうち、最も着用数の多かった「小唐人」装束の上半身の表着とする。中でも江戸時代後期の様相は、文字史料と絵画資料がともに残されており、文字史料からは服飾の名称とその色彩、素材を、絵画資料からは形態を読み取ることができる。但し、管見の限りでは、再現の対象とした茶屋町「唐人」警固の装束は見つかっていないため、実際の寸法、縫製技法は確かめることが困難であり、今回の再現の対象から除外した。そのため、完全な再現は不可能であるが、祭礼に着用された服飾の一端を、史料解釈から一歩進めて、製作および着用可能な形態を模索し、提示することはできると考える。

### 1-2 名古屋東照宮祭礼の概要

名古屋東照宮<sup>2</sup>は、尾張藩初代藩主徳川義直（1600～1650）によって家康の菩提を弔うために勧請された。社殿の完成は元和5（1619）年で、江戸時代を通して名古屋城内二の丸と三の丸の間に位置していた。

名古屋東照宮祭礼<sup>3</sup>は、尾張藩（藩主）主導で行われた近世名古屋城下における最大の公式行事で、開始時期は元和4年から7年頃とされており諸説がある。祭礼行列は政治状況とともに変化したものの、江戸時代を通して中断することなく開催され続け、参加者は、武士、神官、僧侶のほか、城下の町々から出された山車、練物風流であった。町内からの練物は「警固」と呼ばれ、それは「町々の若者たち種々一定の変装をなして神幸に供奉する」<sup>4</sup>ものである。祭礼行列の道筋は、名古屋東照宮を出発し、本町御門を出て、町人居住地域のメインストリートである本町通りを南下し、若宮八幡宮北の御旅所に至る経路を

\*お茶の水女子大学博士後期課程

\*\*茨城キリスト教大学

とった。

茶屋町は、慶長年間開府の町割とともに誕生し、城郭本町御門に近く、本町筋にも接し、優れた地理的位置と高い町格を誇る。茶屋町には、呉服所茶屋中島長意のほか本論で用いる史料を残した呉服商伊藤次郎左衛門など、名古屋町人を代表する名家が居住した。伊藤次郎左衛門家は松坂屋の創業家であり、尾張藩御用達商人として「三家衆」の一角に位置づけられた<sup>5</sup>。茶屋町の「唐人」警固は、宝永元（1704）年に始まり<sup>6</sup>、幕末まで継続して行われた。

## 2. 製作作品の選定とその特徴

### 2-1 製作作品の選定

本論の目的は、近世後期の名古屋東照宮祭礼に登場した茶屋町の「唐人」装束を再現し、名古屋城下で見られた「唐人」装束の一形態を具現化した過程を示すことである。使用する史料は、再現対象の茶屋町の「唐人」装束について記した、名古屋市博物館蔵伊藤次郎左衛門家資料448「御祭礼警固衣裳并諸道具類数書控」、同447「御祭礼警固衣裳入日記目録」<sup>7</sup>である。前者は万延元（1860）年に茶屋町が装束を新調した際に記された史料であり、着用者ごとに装束が列記されていることから実際の着装を念頭に置いて書かれていると考えられる。後者は明治6（1873）年に記されたもので、第1号から第10号まで番号を振って、凡そ装束の種類ごとに列記されているため、収納、保管を目的に書かれたと推測できる。また、装束の説明は、万延元年の史料に比べて詳細である。この二つの史料の間には装束の異同も認められる<sup>8</sup>が、今回再現の対象とした「小唐人」装束においては両者の対応関係が見られる（表2参照）。

また、絵画資料として、尾張藩士高力猿猴庵（1756～1831）と門弟小田切春江による著作『尾張年中行事絵抄』<sup>9</sup>を主に用いる。名古屋東照宮祭礼の様子は、第4・5冊夏の部上下に収められており、比較的詳細に服飾が描写されている。なお、江戸時代後期から幕末にかけて、名古屋東照宮祭礼を描いた絵画資料は他に、「尾張名所図会」<sup>10</sup>、「泰平御神事」（慶応元（1865）年版）<sup>11</sup>などがあるが、装束の描写は概略を捉えるにとどまっているため、参考とするに留める。

参考資料として、火事装束、鎧直垂、陣羽織、襷襟の遺品などの武家服飾、及び、狂言、歌舞伎、文楽の舞台衣裳、祭礼装束についての先行研究、図像を適宜用いる。祭礼装束の遺品では、大垣市の竹島町に伝わる大垣祭軸附朝鮮山車付属品のうち《朝鮮服》<sup>12</sup>を、筆者が大垣市郷土館に於いて2008年1月27日に調査した寸法を用いる。

再現製作作品として、茶屋町「唐人」警固のうち「小唐人」を選定した理由は、茶屋町の「唐人」警固の構成は役柄と人数に年代による異同（表1参照）があるが、「小唐人」は最も人数が多く中心的存在と考えられるためである。

### 2-2 製作作品の特徴

「小唐人」装束の特徴は、江戸時代後期の絵画資料『尾張年中行事絵抄』から、形態の特徴を読み取ることができ、また幕末の史料から、服飾の名称および素材の特徴を読み取ることができる。

表1 茶屋町「唐人」警固の構成

万延元（1860）年		明治6（1873）年		
役柄	人数	役柄	人数	主な号数
大将	（1人）	大将	（1人）	第1号
小唐人	11人	小唐人	11人	第3・4号
楽人	4人	楽人	4人	第2・4号
印持	（1人）	印持	（1人）	第1号
傘持	（1人）	傘指	（1人）	第1号
曲録持	（1人）	曲録持	（1人）	第1号
宰領	（2人）	—		
肝煎	（2人）	—		
若黨	（1人）	—		
奴	（4人）	—		
町代	（1人）	—		
—		笛吹	（1人）	第1号

（名古屋市博物館蔵伊藤次郎左衛門家資料447,448より作成。史料中に役柄の明記されたもののみを抽出し、人数が明記されていないものは、服飾品の数量から推定して括弧書きにした。）

表2 服飾の名称・部位と色彩・素材の関係

構成	部位	万延元年 服飾の名称	色彩	素材	明治6年 服飾の名称	色彩（文 様・技法）	素材
上衣・上着	身頃（表地）	着附 上	猩々緋	—	装束	緋	羅紗
	身頃（裏地）	—	—	—	装束 裏	花色	木綿
	胸飾り布	—	—	—	胸	紺	名物
	胸飾り布の縁	—	—	—	胸へり	萌黄	名物
	小襟	—	—	—	小襟	紺	名物
	小襟の襷	—	—	—	小襟 襷	花色	羅紗
	肩掛（表地）	—	—	—	肩掛	鬱金	羅紗
	肩掛（裏地）	—	—	—	肩掛 裏	（更紗）	木綿
	肩掛の襷	—	—	—	肩掛 襷	華色	羅紗
脚衣	身頃（表地）	着附 下	猩々緋	—	下	緋	羅紗
	身頃（裏地）	—	—	—	下 裏	花色	木綿
	紐	—	—	—	下 紐	花色	木綿
	裾	—	—	—	下 裾	花色	羅紗
下着	下着（上衣）	襦袢	花色	木綿	襦袢 小	華色	木綿
	下着（脚衣）	股引	花色	木綿	股引 小	華色	木綿
	（肉蒲団か）	腹蒲団	—	—	服ふとん	鬱金	木綿

（名古屋市博物館蔵伊藤次郎左衛門家資料447, 448より作成，付属品を除く）

第一に、形態の特徴は、『尾張年中行事絵抄』(図1)の描写より、次の点を窺い知ることができる。

まず、㊶首周りに密着した肩掛が存在する。但し、上衣の首周りの開き方は肩掛に覆われていて不明である。肩掛は、装飾的な要素であるだけでなく、上衣身頃の首周りの開きを隠す役割があった可能性が考えられる。そこで、首周りの開き方を推定するにあたって、㊵上衣に前開きのラインがない点に注目すると、「小唐人」の上衣が小袖のような前開き型の衣服ではなく、貫頭衣またはチャイナドレスのような前身頃の合わせ方が考えられる。背面は、㊷半身のみの描写であるため、背縫いの有無は不明である。

袖は、㊸腕に密着した手首までの筒袖であり、袂がない。小袖を日常的に着用していた江戸時代の人々にとって非日常的な袖が採用されたことが分かる。㊹袖付けのラインが描かれていないことから、袖は身頃と一続きで裁断されたと推定される。なお、小袖を描いた場合は、袖付けのラインが描かれている。

さらに、帯状のラインが㊺胸の高さにあるが、前面のみであるため、上衣を固定するための帯(または紐)ではなく、装飾を表すと判断した。着装を整えるにあたって、㊻ウエストの位置で帯を締めたことが窺われる。㊼脚衣は、細身のズボン状である。

第二に、「小唐人」装束の主な服飾の名称および素材について、名古屋市博物館蔵伊藤次郎左衛門家資料448(史料1)、447(史料2)をもとに(表2)を作成し、素材の配置、表地の色彩の配置、裏地の各点から、その特徴を検討する。

(史料1)は、万延元年の史料に記された「小唐人」の装束であり、(史料2)は、(史料1)より窺われる「小唐人」装束のコーディネートを参考に、明治6年の史料からそれと考えられる部分を拾い出したものである。

(史料1)「御祭礼警固衣裳并諸道具類数書控」(万延元年)

(※括弧内は割書である。下線は筆者が施した。以下同じ。)

一 小唐人 拾壹人/猩々緋着附上下拾壹人前/花色木綿繻半股引/腹蒲団 拾壹/石帯シカミとも拾壹萌黄紐三拾三筋/釵拾壹本(浅黄ふさ付紐拾壹筋/萌黄紐拾壹筋)/団扇拾壹本/笠 拾壹 沓拾壹足

(史料2)「御祭礼警固衣裳入日記目録」(明治6年)

第三号/小唐人装束 拾壹人前/緋羅紗裏花色木綿/胸紺地名物胸へり萌黄名物/小襟紺地名物ひだ花色羅紗/肩掛鬱金羅紗裏更紗木綿/ひだ華色羅紗/(後略)、

第四号(前略)/小唐人 下計拾壹人/緋羅紗裏紐共花色木綿/裾花色羅紗/(後略)、

第六号/唐人華色木綿大小繻絆股引/拾九人前宛(但し衿 浅黄袖)/襜

第七号(抜粹)萌黄石帯襜紐 拾六但し金襴留付/浅黄釵紐房附 拾式/同萌黄房なし 拾式/軍扇 拾壹/釵(此品賣立之節求ム) 拾壹

第九号(抜粹)冠笠(此品賣立之節求ム) 拾六/汗取 拾壹/鬱金木綿服ふとん 拾七

まず、素材の配置に着目すると、名物の裂は、襟、胸の飾りに用いられており、比較的

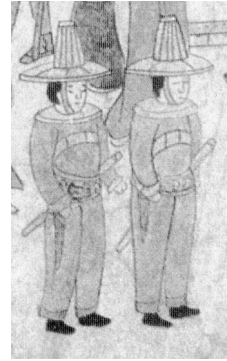


図1 『尾張年中行事絵抄』部分



小さい裂で足りる部分に採用されたといえる。一方、羅紗は袷の表地および襷布に用いられ、表から見える部分の多くの面積を占める。これらの表の布に対して、袷の裏地や下着に相当する襦袢、股引には木綿が用いられている。

次に、表地は、上衣、脚衣ともに緋色の羅紗が用いられている。(史料1)では、「着附上下」即ち上衣と脚衣は猩々緋と記されているが、猩々緋は『万金産業袋』巻之四唐物類に「○羅紗(中略)色いろいろ。赤きをは猩々緋といふ。(後略)」<sup>13</sup>とあり、舶来の毛織物で、赤い羅紗地であるため、(史料2)の「装束」(上衣)および「下」(脚衣)の表地を指す「緋羅紗」即ち赤い羅紗は、(史料1)の猩々緋(羅紗の赤いもの)と同義と考えられる<sup>14</sup>。観衆にはほぼ全身を覆う鮮やかな赤が印象に残ったことだろう。また、肩掛の表地は鬱金色の羅紗であることから、広い面積は暖色の色使いである。これに対し、小襟と肩掛の外周に施された襷および脚衣の裾に花色、即ち淡藍色<sup>15</sup>の羅紗が用いられており、暖色の多い面に帯状に寒色の飾りが配置されている。特に、襷に加工された部分の装飾性は高かったと思われる。また、小襟と胸の飾りに用いられた紺地の名物の裂は、帯状に低明度の部分を作り出し、全体を引き締めたと推測される。「小唐人」の装束の配色は、比較的彩度が高く、色相差の大きい色同士が隣接する傾向にあり、見る者に極彩色の印象を与えたと思われる。

最後に、上衣、脚衣の裏地、襦袢、股引は、花色(華色)の木綿が用いられている<sup>16</sup>。花色木綿は、多く裏地に用いられ、人目につかない部分に使用されるものと思われるため、裏地と同様に花色木綿が用いられた脚衣の紐は、着用時に表から見えないものであったと考えられる。

一方、肩掛の裏地には更紗木綿が用いられている。肩掛は裏地であっても風などで翻って観衆に見られる可能性があると思われる。身頃の裏地など完全に内側に入って見せることがない部分には花色木綿を用い、多少なりとも観衆から見える可能性のある肩掛の裏地に更紗木綿を用いる、という裏地の使い分けから、あくまでも外見を華やかに見せようとする熱意が感じられる。祭礼装束というハレの服飾に求められた美意識は、表地よりも裏地に凝る美意識とは異なるものであったことが窺われる。

### 3. 製作方法

茶屋町の「唐人」装束は、前述のように伊藤次郎左衛門家資料に服飾の名称および素材、色彩が記されており、また『尾張年中行事絵抄』の挿絵にその姿が描かれているため、警固の役柄ごとの着装を推定することができる。しかし、再現を試みるために必要な寸法、構成を実物遺品に求めることはできないため、年代の近い他の祭礼装束などを参考に試作を行い検討した。

「小唐人」は史料から子供用であることが窺われるが、試作を繰り返して寸法および製作過程を検討するため、大人の寸法を用いた。各部寸法および構成は、神谷榮子氏<sup>17</sup>、丹野郁氏<sup>18</sup>の論考を適宜参照し、また、大垣祭の実物遺品《朝鮮服》(写真1)を大垣市郷土館に於いて2008年1月27日に調査した値を参考にした。なお、江戸時代後期の成人男性の平均身長は、平本嘉助氏によると、156cmであるという<sup>19</sup>。上記の参考寸法は、おおよそこれに当てはまると思われる。

### 3-1 各部位の試作

試作は、「御祭礼警固衣裳入日記目録」に記載された「装束」、「小襟」、「肩掛」について行った。「胸」は、2-2 製作作品の特徴④の飾りを指すと判断し、「装束」に付ける位置の確定に留めた。また、試作には平織りシーチングを用いた。

#### 3-1-1 「装束」

「装束」は、上半身に着用する上着に相当すると思われる。試作では、『尾張年中行事絵抄』の挿絵からは判然としない首周りのあわせ方と、手首に密着する長袖の筒袖の付き方を中心に検討した。

まず、首周りは小襟を付けるため、着装時に首に密着すると推測した。首周りの合わせ方は、前開き型の衣服で袖口の細い遺品が残る① 鍔直垂の例と、芸能衣装で着用されてきた裃襦のような②貫頭衣に筒袖を付けた形の試作を行った。

①では、丹野氏の研究から、伝細川忠興着用 of クリーム色紗綾鍔下（熊本市島田家所蔵）の寸法<sup>21</sup>を用いて試作をした。試作品の上前の衿を脇線まで延長することで前中心の縫い目をなくし、且つ下前と延長した衿とをループボタンで留め、肩掛の下に隠すことを検討した。しかし、①の方法では、前身頃の重なりが大きく、下前に木綿の素材を用いても試着時にもたつきが気になった。

素材に用いられた羅紗は、『万金産業袋』巻之四に「唐物類○羅紗 幅はかねざし四尺壱寸位より三四寸まで」<sup>22</sup>とあり、約125cm～136cmほど幅の広い布であったと考えられる。また、「地は々ゆきにたにあは々、みな一つ身だちと心得へし」<sup>23</sup>とあり、左右の身頃と袖を一枚で採ることが推奨されている。身頃と左右の袖を一続きに裁断した遺品に、女子用の火事装束があり<sup>24</sup>、「一つ身だち」は実際に行われたことが分かる。

一方②では、身頃は袖無陣羽織型の大垣祭の遺品の採寸寸法を用い、袖は同じく大垣祭の遺品のうち《朝鮮服袖》と呼ばれる、袖のみが独立している遺品の採寸寸法を用いて試作を行った。初めに身頃と袖を別々に試作、試着して着用状態を確認し、十分な寸法であったため、身頃と袖を縫製して試着を行った。近世では筒袖を身頃に付ける際、「火打」<sup>25</sup>と呼ばれる四角形を半分にした三角の布を、袖下と脇の間に付け足して仕立てる方法が採られることがあるが、袖自体が袖口と袖付けの寸法差のある台形の場合は、「火打」が用いられない場合も見受けられる<sup>26</sup>。試作を試着したところ、「火打」を付けない状態での着脱が可能であったため、身頃と袖をそのまま接続した形とした。また、左右の袖口と身頃を合わせた長さは、羅紗の布幅に収まったため、火事装束の遺品と同様に身頃と袖を一続きに裁つことが可能である。

襟ぐりは、小襟の寸法（後述）に合わせて大きさを計算し、前身頃の繰りを半円形とし、

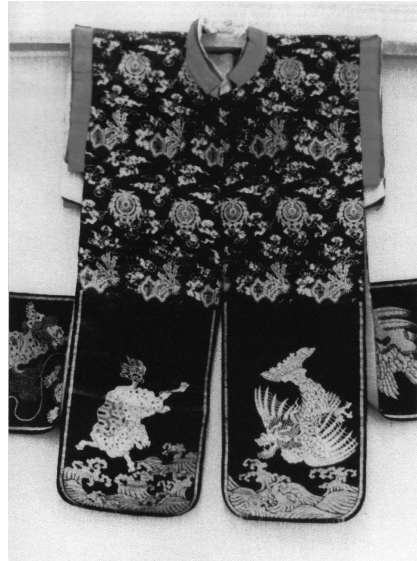


写真1 大垣祭 竹島町《朝鮮服》

後ろ側は浴衣に準じた後ろ繰り越しを設けることで、着装時の着心地を考慮した。また、着脱に必要な襟ぐりの大きさを確保するため、後身頃の中央で切り開き、ループボタンで留めることを検討した。胸の飾りの位置は、『尾張年中行事絵抄』の描写から、袖付けの少し下になるところとした。試着の結果、すっきりした着心地を達成した②を採用した。各部の寸法は後述の型紙とともに図示する。

### 3-1-2 小襟

小襟は、「被布の襟肩明の周囲につけた三日月形のえり」<sup>27</sup>、また「首のまわりを囲む細長い部分」<sup>28</sup>を指す。『尾張年中行事絵抄』の挿絵では小襟に相当する描写を確認できないが、「名物」の裂が使用されたことから、人目につくよう身頃に付けられたと考えられる。絵画資料の描写では、首まわりに密着する位置から後述の「肩掛」が描かれているため、これに隠れない小型の襟を想定し、今回の再現では大垣祭の《朝鮮服》を参考に立襟と推定した。

形状は、立襟とするため、長方形とした。寸法は、周径は首周りにぴったり沿う長さと考えられるため、紀州東照宮所蔵、伝徳川頼宣着用 of 袷襟のうち、大人用と考えられる物の長さを用い45cm<sup>29</sup>とした。また、襟の高さ（幅）は、大垣祭遺品の最も表側の襟の計測値3.5cmとした<sup>30</sup>。身頃に小襟を付ける方法としては、①身頃の表側から付ける方法と②身頃の裏側から付ける方法とが考えられるが、大垣祭遺品を参考に、①を採用した。

小襟の袷は、小襟に「名物」が用いられているため、小襟が隠れないように付けられたと推定し、①小襟の内側に重ねて小襟の上端から袷が覗く、袷と小襟とが一体となった立襟、②小襟の襟ぐりに沿って外側に付け、身頃に沿ったショールカラーのような袷の二通りを試作し検討した。

襟ぐりの袷が上向きとなる①の類例として、『韓人戯馬図』<sup>31</sup>に描かれた馬上才の服飾（図2）、大阪城天守閣蔵《富士御神火文陣羽織》<sup>32</sup>（図3）などの陣羽織の遺品に見られる。一方、②のように袷が襟から身頃に沿う遺品は、徳川黎明会蔵《天鷲絨地飛龍丸文様唐人装束上衣》<sup>33</sup>（図4）、川越市立博物館蔵《乙姫衣裳》<sup>34</sup>（図5）、岐阜県、真桑文楽の衣裳<sup>35</sup>など、祭礼の「唐人」衣装や芸能衣装に見られる。今回の製作では、祭礼装束の再現を目指すため、祭礼や芸能装束に類例のある②の方法で袷飾りを付けることにした。

また、（図2）から（図5）の遺品は、袷は箱袷に畳まれているため、再現製作ではこれに倣った。



図2 『韓人戯馬図』部分



図3 《富士御神火文陣羽織》



図4 《天鷲絨地飛龍丸文様唐人装束上衣》



図5 《乙姫衣裳》



図6 襟袈裟



図7 「青楼仁和嘉二の替わり・見立唐人行列」

### 3-1-3 肩掛

肩掛は、『尾張年中行事絵抄』で首周りから肩にかけて円形に描かれた部分を指すと推定される。これと類似した芸能衣装に、文楽の衣裳で「襟袈裟」と呼ばれる「中国人の唐風衣裳を模した…肩を覆う芥子の花びら状のケープのようなもの」<sup>36</sup> (図6)がある。歌舞伎で「ぴんどこ」<sup>37</sup>と呼ばれる衣装もこれと同様のものであろう。また、吉原の俄<sup>38</sup>で、遊女が「唐人」に扮した姿が描かれた喜多川歌麿の浮世絵「青楼仁和嘉二の替わり・見立唐人行列」に、首ぐりからは離れているが肩から肘あたりまでを覆う円環型に襷飾りの付いた物を身につけている様子が見られる<sup>39</sup> (図7)。肩掛は、芸能衣装や仮装において「唐人」に扮したことを示す服飾のひとつであったようである。

歌麿の描いた肩掛状のものは、頭から被って着用するのに十分な大きさの円形に刳ってあるが、茶屋町の「唐人」を描いた挿絵では首周りに密着するように肩掛が描かれているため、試作では、上衣の上に重ねて着用することを考慮しつつ、できるだけ首周りを小さくするよう寸法を検討した。また、首周りの形は着用時の収まりの良さを考え、上衣の襟ぐりと同様の形で一回り大きくなるようにした。肩掛の前丈は、上衣の胸の飾りが隠れない長さとし、横幅は上衣の肩幅に沿うよう調整した。後ろ丈は前丈に揃えることとし、肩



掛の外周は左右より前後の幅の狭い楕円形となった。着用時の便を考え、後ろ中心に小さい開きを作った。また、肩掛の外周に施す襷は、小襟の襷と同様、箱襷とした。

### 3-2 型紙作成

上記の試作をもとに、作成した型紙を寸法とともに(図8)に示す。

### 3-3 再現製作

再現製作にあたっては、伊藤次郎左衛門家資料447に記載されている色彩および文様・技法、素材に近い物を選定するよう努めた。史料記載の色彩等・素材と、再現製作で使用した色彩・素材の対応を(表3)に示す。木綿は、並幅にカットして使用した。

以下に、再現製作過程を記す。再現製作は、和裁の方法を取り入れつつ、適宜ミシンを使用した。

〈裁断と印付け〉

- (1) 金襴地を裁断・印付けをする。紺地=小襟、胸の飾り。萌黄地=胸の飾りの縁取り。
- (2) 花色木綿を並幅にする。
- (3) 花色木綿から袖と身頃の裏地を裁断し、印付けをする。
- (4) 更紗木綿から肩掛の裏地を裁断し、印付けをする。

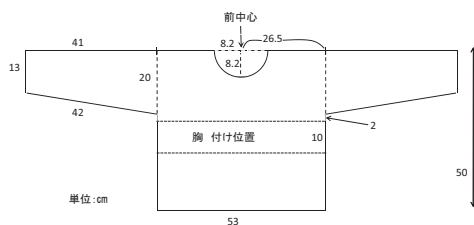


図8-1 前身頃

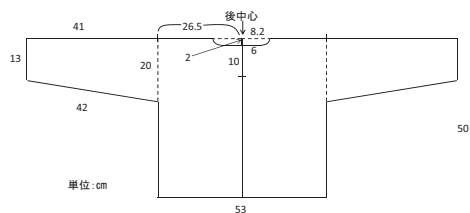


図8-2 後ろ身頃

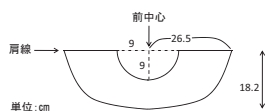


図8-3 肩掛(前)

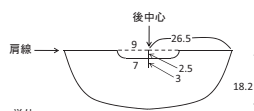


図8-4 肩掛(後)

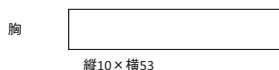


図8-5

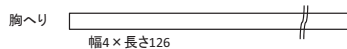


図8-6

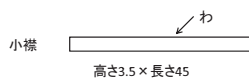


図8-7

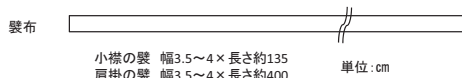


図8-8

表3 「御祭礼警固衣裳入日記録」記載の色彩・素材と再現色彩・素材の対応

史料記載色彩 (文様・技法)	史料記載素材	再現素材の色彩	再現素材
緋	羅紗	赤	フラノ
花色・華色	羅紗	水色	フラノ
鬱金	羅紗	橙	フラノ
紺	名物	紺	ポリエステル金襴
萌黄	名物	黄緑	ポリエステル金襴
花色	木綿	水色	シーチング
(更紗)	木綿	黄	木綿プリント

(※「鬱金」色は黄の範疇であるが、再現素材の入手の都合上、橙で代用した。)

- (5) 表地を裁断する。印付けをする。緋地＝身頃、袖。鬱金地＝肩掛。花色地＝襷布。  
(金襴地、木綿の縫い代はロックミシンで始末)

#### <縫製>

##### A：裏地（袖→身頃→袖＋身頃→肩掛）

- 袖裏地を接ぎ合わせる。  
袖裏地は、袖幅41cmが木綿並幅より広いため、袖口側で布を継ぎ足した。縫い代は袖付け側に折る。
- 袖口の縫い代を二つ折りにし、端ミシンで始末する。
- 身頃の背縫い、前身頃の中央を縫う。襟肩あきの後ろは10cmあけておく。  
襟肩あきを右手に持って、縫い代にきせをかけて手前に折る（浴衣に準じて処理）。
- 袖（裏地）と身頃（裏地）を縫い合わせる。  
身頃と袖を中表に合わせ、前袖付けの合い印から後ろ袖付けの合い印までを縫う。  
袖下を縫う（袖口から袖付けへ）。脇を縫う（袖下から裾へ）。  
袖側に折った袖の縫い代は、肩山のところで一針留める。  
身頃側に折った身頃の縫い代は裁ち落とさず、耳ぐけする（浴衣に準じて処理）。
- 肩掛（裏地）の背縫い、前身頃の中央を縫う。襟肩あきの後ろは3cmあけておく。

##### B：胸の飾り

- 縁取り布（萌黄地金襴）を中表に合わせて、つなぎ合わせ、1本にする。
- 紺地金襴の4辺（周囲）を額縁になるように、萌黄地金襴で縁取りする。

##### C：小襟

- 小襟の左右の端を縫う。
- 小襟の襷布を箱襷に縫う。箱襷の幅は1.5cm前後とした。



#### D：表地（身頃）

- (1) 袖口を二つ折りにし、端ミシンをかける。
- (2) 袖下、脇を縫う。
- (3) 袖下と脇の縫い目の接点に向かって、縫い代に切り込みを入れる。
- (4) 縫い代を後ろ身頃側に倒し、表に返して形を整える。
- (5) 胸の飾り布（B）を纏り付ける。
- (6) 後ろ開きの始末をする。

表に同系色の薄布をあて、切り込み線の周囲2mm位のところを細かい針目で縫う。切り込みを入れる。当て布を裏に返し、アイロンで押さえて、しつけをかける。

#### E：身頃をあわせる

- (1) 身頃の裏地と身頃の表地を外表に合わせる。
- (2) 身頃の襟ぐりに、小襟の襷布を表が上になるように乗せ、印を合わせて縫い付ける。
- (3) 小襟の表側を身頃の襟ぐりの印に合わせて縫う。
- (4) 小襟で縫い代を挟むように折り返し、纏り付ける。
- (5) 裾の始末をする。
- (6) 袖口の表地と裏地を纏り付ける。
- (7) 後ろ開きにループボタンをつける。

#### F：肩掛

- (1) 襷布を箱襷に縫う。箱襷の幅は1.5cm前後とした。
- (2) 表地の後ろ開きを、身頃の後ろ開きと同様に始末する（D—(6)参照）。
- (3) 表地と裏地を中表に合わせ、襷布を表が表地側になるように間に挟んで外周を縫う。
- (4) 表に返して形を整え、首ぐりを纏る。

## 4. 結果および考察

（写真2）は、再現した「小唐人」装束（上衣表着）の完成着装図である。

管見の限りでは、再現の対象とした茶屋町「唐人」警固の装束は見つかっていないため、その様子を描いた絵画資料、装束の名称、色彩、素材が記された文字史料、および類似の実物遺品、絵画資料を参考に最も適当と思われる形態を形作ることに努めた。実際に装束の形を再現することにより、紙上の考察では判断の難しかった装束の細部について、詳細な検討を加えることができた。特に、小襟と小襟に付ける襷飾りの位置は、絵画資料に明確に描かれていないため、参考資料を考慮しつつ、実際に布地を扱う中で製作可能な形態を



写真2 再現製作

模索し、少しでも実態に近づけたのではないかと思う。

また、身頃と肩掛の襟ぐりの開き方については、参考資料をもとに試作と試着を繰り返すことで、首に沿う形態と寸法を得ることができた。但し、試着では洋服着用慣れた筆者が行ったため、小袖での暮らしをしていた江戸時代の人の感覚にどこまで迫ることができたか心許ない点もあるが、現代人の感覚でもやや窮屈な装束に仕上がった。

今回の再現では、資料的制約により縫製技法は考慮に入れることができなかった。また、「小唐人」装束は実際には子ども用の装束であるが、試着による試作の都合上子どものサイズでの再現を断念した。実際の縫製技法、着用者の体型に合った寸法については今後の課題としたい。

## 5. まとめ

今回、再現を試みた名古屋東照宮祭礼、茶屋町の「唐人」装束は、実際に着用されて祭礼に参加した人、見物した人の目を楽しませたものである。文字史料は、服飾の名称、色彩、素材を後世に伝え、絵画資料は形態をおおよそ伝えている。実物遺品を見ない状態での再現の試みは、現代人の創意や“常識”が反映される可能性が否定できないため、完全なものではない。しかし、できる限り同時代の参考になる品を参照することで再現対象の服飾に迫ることはできると考える。服飾品は遺品が現存しない場合も多いため、残された手がかりをもとに再現を試み、衣服として着用可能な状態を提示することの意義は大きい。

## 謝辞

貴重な資料の閲覧を御許可くださいました、国立国会図書館、名古屋市市政資料館、大垣市教育委員会、大垣市郷土館、大垣市竹島町など関係諸機関の皆様に感謝申し上げます。

## 文献

- 1 拙稿「祭礼の「唐人」装束—名古屋東照宮祭礼・茶屋町を事例に—」（『服飾美学』第55号）2012年9月、19～36頁
- 2 『愛知県史別編民俗二尾張』2008年3月、『新修名古屋市政資料編民俗』2009年5月、『新修名古屋市政史第九巻民俗編』2001年3月、『新修名古屋市政史第三巻近世Ⅰ』1999年3月
- 3 久留島浩「長崎くんち考 城下町祭礼としての長崎くんち」（『国立歴史民俗博物館研究報告』103号、2003年3月、79～114頁）。中野光浩『諸国東照宮の史的研究』名著刊行会、2008年11月、258～260頁。伊勢門水『名古屋祭』村田書店、1910年。清水禎子「尾張における奏楽人の活動について」（『尾張藩社会の総合研究』第二編、清文堂、2004年3月、316～344頁）。同「東照宮祭礼と城下町名古屋」（『尾張藩社会の総合研究』第三編、清文堂、2007年3月、74～99頁）
- 4 『名古屋市政風俗編』1915年、653頁
- 5 『新修名古屋市政資料編近世Ⅰ』2007年3月、解説719頁
- 6 ①「茶屋町／最初長刀持（塗師又五郎 飴師後藤某）出セシ／宝永元甲申年唐人ニ替ル」（『張州雑誌』内藤東甫（1728～1788）著。尾張国の地誌。20～23巻が「名古屋東照宮祭礼図」に充てられている（『名古屋市蓬左文庫蔵 張州雑誌』愛知県郷土資料刊行会、1975年6月、所収）。②「茶屋町、唐人のけいご 最初は長刀指のけいご、宝永元年に、唐人のけいごに替る。」（『尾張年中行事絵抄』（名古屋市蓬左文庫編『名古屋叢書』3編第5巻、1988年3月、所収））
- 7 史料の題目は名古屋市政資料館目録による。伊藤次郎左衛門家資料は同館でマイクロフィルム紙焼複製本が公開されている。
- 8 例えば、万延元年に記載のない「笛吹」が明治6年の史料では登場していること、「印持」の装

束が変化していることなどがあり、明治6年の史料には、沓、髭、眉毛の記載がない。

- 9 前掲注6 ②
- 10 天保12(1841)年序。国立国会図書館蔵
- 11 『新修名古屋市史資料編民俗』2009年5月、所収
- 12 鄭銀志氏は「馬上才絵巻」に描かれた馬上才の服飾を裏付ける実物資料として参考に挙げられている〔鄭銀志「江戸時代における朝鮮通信使の服飾」(『服飾文化学会誌』4巻1号)、2003年、22~23頁〕。
- 13 三宅也来『万金産業袋』(『生活の古典双書』5)、八坂書房、1973年5月、91頁。また、『近世風俗志』巻之19に、「猩々緋以下、舶来の毛織なり。綿羊の毛をもつてこれを織る。猩々緋は赤色なり」とある〔喜田川守貞『近世風俗志』(3)岩波文庫、2003年4月、187頁〕。
- 14 前掲注1
- 15 「花色 紺よりやうやくに淡きを云ふ。花田色の中略なり。花田、本字縹なり。(中略)今俗ははなだと云はず、皆はないろとのみ云ふ。」〔前掲注13、喜田川守貞『近世風俗志』(3)166頁〕
- 16 なお、大垣祭軸附朝鮮山車付属品のうち《朝鮮服》と同日に調査した《朝鮮服袖》は、表地が羅紗で赤、黄の二つが現存し、裏地はともに濃い水色の木綿であった。「花色木綿」の裏地の実例を示すものと考えられる。
- 17 神谷榮子『紀州東照宮の染織品』芸艸堂、1980年7月、図D4-24、解説17~18頁
- 18 丹野郁『南蛮服飾の研究』雄山閣出版、1976年11月
- 19 平本嘉助「江戸時代人の身長と棺の大きさ」(『墓と埋葬と江戸時代』)吉川弘文館、2004年8月、201~223頁。同「中世・近世人の身長と埋葬について」(『中近世史研究と考古学』)岩田書院、2002年、205~230頁
- 20 貫頭衣形式で、胸と背だけを覆うもの。現在でも宮内庁の舞楽装束には裃袴装束が伝わっている(丹野郁(編)『総合服飾史事典』雄山閣出版、1980年、421頁)。例えば、東京国立博物館蔵《紺地牡丹唐草文様金襴裃袴》(小笠原小枝(編)『日本の染織』第4巻舶載の染織、中央公論社、1983年1月、図2)がある。
- 21 前掲注18、93頁、図解5
- 22 前掲注13、三宅也来『万金産業袋』91頁。河村まち子氏、今井温子氏は、同書をもとに、「巻の4に輸入羅紗の裂幅は、曲ざし4尺1寸から3寸までと記載がある。(中略)羅紗の裂幅は、現代の寸法でおよそ125~131cmであったと考えられ」としている(66頁)。(河村まち子、今井温子「黒羅紗地裾緋羅紗山形文様陣羽織の復元」『共立女子大学家政学部紀要』第46号、2000年、61~66頁)。筆者の確認した裂幅はとは誤差があるが、おおよその値として参照した。
- 23 前掲注13、三宅也来『万金産業袋』92頁
- 24 例えば、美濃大垣藩主戸田家旧蔵《火事装束》江戸時代後期、緋羅紗地(『開館10周年記念 館蔵名品展』文化学園服飾博物館、1989年10月、図22)、東京国立博物館蔵《女子火事装束一具》(山辺知行(編)『日本の染織』第3巻武家の染織、中央公論社、1982年12月、図34~36)がある。
- 25 喜田川守貞『近世風俗志』(2)岩波文庫、2003年4月、384頁「筒袖襦半図」
- 26 例えば、紀州東照宮蔵《伝徳川頼宣着用藍染小紋上布鎧下》(前掲注18、110頁、図52)がある。
- 27 『日本国語大辞典』第7巻、小学館、1974年、641頁「小襟」②
- 28 鑄木香緒里(編)『きものの基本一問一答』辰巳出版社、2007年8月、92頁
- 29 前掲注18、102頁、図解8。なお、神谷氏は同遺品について、首周りに当たる釦の位置からループの位置まで44cmと解説されている(前掲注17)。
- 30 なお、河村まち子氏、今井温子氏は、陣羽織の復元製作に際して、立襟の襷襟の出来上がり幅を「何回か着装し検討した結果、4cmと決めた。」(前掲注22、65頁)とされており、大垣祭遺品の立襟の幅3.5cmは現実的な高さと思われる。
- 31 『淀渡辺家所蔵朝鮮通信使関係文書』(『叢書京都の史料』11)京都市歴史資料館、2010年2月、303~307頁。前掲注12で鄭氏が挙げられた「馬上才絵巻」と同じものを指す。
- 32 『ジャパニーズ・ポップ 信長・秀吉・家康—ファッションにみる桃山時代—』郡山市立美術館、2006年10月、図11
- 33 切畑健(編)『日本の染織』第8巻芸能衣裳Ⅱ狂言・歌舞伎、中央公論社、1983年5月、図19
- 34 『川越氷川祭礼の展開』川越市立博物館、1997年、図56。染谷家旧蔵。文政9年の川越氷川祭礼の際、喜多町が出した浦島の練り物の中で、乙姫の輿に乗っていた近江屋平六娘とく女が着用したものと伝えられている。襷飾りは、紅と浅葱色の縮緬で二段に付けられているという(97頁)。

- 35 山田令子, 林豊子, 長谷川裕里子 「岐阜県の祭礼衣裳の研究—真桑文楽の衣裳について—」 (『岐阜市立女子短期大学研究紀要』第38輯) 1989年3月, 57~74頁, 図5 整理番号ジ1-24
- 36 人形遣いが針金や竹を用いて肩の張りを出して着付けるもので, 若い町娘の背にかける「衿袈裟」とは別物である。〔清水久美子 (解説) 『文楽の衣裳』 (古典芸能入門シリーズⅣ) 独立行政法人日本芸術文化振興会, 2009年8月, 90頁②〕
- 37 「歌舞伎衣装の一種。俳優が唐人に扮するとき用いる, 涎掛に似た襟袈裟で, 針金を入れて左右へピンと張ってあるもの。」 (『日本国語大辞典』第17巻, 小学館, 1977年, 234頁)
- 38 俄は祭礼の練り物・造り物風流を基盤に, 大阪で享保期 (1716~35) 後半に発生したといわれ, 内容は仮装の滑稽, 寸劇風のもの, 舞踊と形は様々であったという。吉原俄は大阪の俄の形を移入し, 享保末年あるいは明和 (1764~71) 初年からといわれる (佐藤恵理『歌舞伎・俄研究』新典社, 2002年2月, 385頁)。また, 「にわか (仁和嘉, 俄)」とは, さまざまな趣向を凝らした郭内のパフォーマンスのことをいう, とある [ロナルド・トビ『「鎖国」という外交』 (『日本の歴史』第9巻) 小学館, 2008年8月, 269頁) ]。
- 39 ロナルド・トビ 「歌麿のエキゾチックとエロチック」 (浅野秀剛・吉田伸之 (編) 『浮世絵を読む2 歌麿』朝日新聞社, 1998年3月, 47~59頁)。前掲注38, ロナルド・トビ『「鎖国」という外交』 269~272頁。

A Reproduction Trial of the Festive “Tojin” Costume  
—In the Case of Chayamachi during the Nagoya Toshogu Shrine Festival—

Kiyomi Okimoto, Michiko Ougizawa

**Abstract**

We tried to reproduce the “Tojin” (a generic term for foreigners in the early modern period of Japan) costumes in Chayamachi during the Nagoya Toshogu Shrine festival, in the late Edo-period. While studying the festive costumes, we felt it necessary not only to construe historical materials but to reproduce and actually try fitting them on to capture the configuration that could be worn without constraint.

We chose the jacket of “sho-Tojin” (Tojin children) as the object of reproduction. The costume was the most worn type by the participants of the Chayamachi’s parade. As far as we know, costumes of Tojin in Chayamachi have never been found.

First, we considered the characteristics of the “sho-Tojin” costumes through literature and pictorial materials and strove for historical authenticity of the structure around the neck, the small collar, the cylinder sleeves, and the shape of the cape. And then, we went through the process of trial and error in recreating. Finally, we reproduced the “sho-Tojin” jacket, making every effort to select the coloring, patterns and technique close to those stated in the “Ito Jirozaemon papers No.447” of the Nagoya City Museum Collection.

With limited information on reproduction and unclear information on the actual size and the sewing techniques, a complete reproduction was impossible. However, because there are only a limited number of historical clothing ornaments that are existent, there is significance in recreating costumes using contemporary accounts and to present them in a form that can actually be worn.